

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

計画：1-1

ニホンザルの採食行動の群間比較

田中 香（京都大学霊長類研究所）

地域ごとの植生の違いは、ニホンザルの行動や個体群動態に大きな影響を与える。ニホンザルの採食行動の地域による違いを明らかにすることは重要である。そこで本研究では、金華山に生息する6群のうち2群を対象として、ブナの種子の採食に焦点をあて、ニホンザルの採食行動を群間で比較した。

個体追跡法により、中順位、非発情のオトナメス2頭ずつをA群、B1群から選び、行動を記録した。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 調査期間中、ブナの種子の採食には両群とも、採食時間の約60%を費やしていた。各群のサイズはA群の方が大きい。また、調査期間中の、遊動域面積や個体の1日の移動距離に違いは認められなかった。

2) 調査期間中各群が利用した、遊動域内のブナの採食パッチ密度は、A群の遊動域の方がやや高かったが、1日に利用したパッチ数に、違いは認められなかった。また、1つのパッチあたりの利用回数はB1群の方が高かった。

3) 採食を開始した時点の採食速度は、A群の方が高かった。しかし、A群では採食時間の経過とともに、採食速度の低下が認められた。

4) 1つの採食パッチで同時に採食を行っている個体数（採食集団の大きさ）は、A群の方が、大きかった。

これらのことから、以下のことが考えられる。A群の遊動域の方がB1群の遊動域より、ブナのバッチ密度が高く、かつ各バッチの質は高い。しかしながら、A群では採食集団が大きいいため、採食速度が低下するのが早く、次々と新しいバッチを利用する方が効率的である。これに対し、B1群では、比較的質の低いバッチしかなく、バッチの密度も低いが、コストをかけて質の高いバッチを探すより、同じバッチを何度も利用した方が効率がよいことが予想される。

以上のように、金華山の隣接する2群間で、ブナの分布状況とブナの採食パッチの質および、群サイズの違いに起因すると考えられる、採食様式の違いが認められた。

今後は、さらに他地域との比較を進め、ニホンザルの採食行動と、食物の分布との関連について解析する予定である。

計画：1-2

東丹沢山塊の野生群の個体数動態

福田 史夫

東丹沢には4群が確認され、さらに10頭以下の小集団を確認した。この小集団を除いて、各群れの大きさは60頭以上であり、100頭を越える群れも存在した。20年前の調査では（川村他、1973）、この地域には少なくとも3群が存在していたが、いずれも40頭以下の小さなサイズの群れであった。

この地域におけるサルの個体数増加はどのような原因に基づくのか、まだ分析途中であるが、確実な要因として植林地の問題がある。20年前は、拡大造林によって、二次林が切り払われ、東丹沢一体の山の斜面は杉の植林となっていた。その結果、サルたちの食物宝庫であった二次林を奪われたサルたちが、急激にその個体数を減らしていた時期であった。逆にシカは個体数を増加させた。現在の植林地は、下草刈りや枝打ちなどの手入れがされていないため、サルの好物の一種であるアケビ、サルナシ、ジャケツイバラなどの蔓性大木が入り込み、さらにはそのほかの雑木まで繁茂し始めていた。

これらのことから、東丹沢のサルの個体数が増加した原因は、植林地のみにサルの食物となる二次林が入り込み、サルたちの生息地が拡大造林される前の薪炭林の状況に近くなってきているためだと考えられる。その結果食物の増加によって出産率が上がり、乳児死亡率が下がり、さらには、オスの群れ離脱年齢も遅くなっているためと考えられる。

このサルの個体数変動と全く逆の道を辿っているのはニホンジカである。

本調査では、正確な群れの、1) 性・年齢構成とサイズ、2) 行動域の大きさ、3) 植生、4) 食物、を明らかにすることはできなかった。

今後、出来るだけ各群れを追跡して構成を明らかにして、餌付け群の増減期や飽和期の構成と比較をして、東丹沢の各群れがどのような変動期に当たるのか分析を試みたい。

計画：1-3

野生ニホンザル個体群に対する有害駆除の影響

羽山 伸一・小西 綾子
(日獣大・野生動物)

羽山ら(1991)は、有害鳥獣駆除で滋賀県においてオリ捕獲された野生ニホンザルの性・年齢構成を調査し、地域個体群からランダムに捕獲されていないことを明らかにした。

本研究では、福井県若狭地方でおもに射殺によって捕獲された野生個体を回収し、その性・年齢構成、繁殖状態、栄養状態などを分析し、有害鳥獣駆除が与える個体群への影響を考察する。

今年度は、30頭の個体を回収し、性および年齢区分を確認し、現在、絶対年齢および繁殖状態などを分析中である。

性別は、オス13頭、メス16頭、不明1頭であった。また、年齢区分は4才以下の個体が4頭、5才の個体が1頭、6才以上の成獣が25頭であった。

この結果は、羽山ら(1991)の結果よりもさらに成獣ならびにメスの比率が高く、個体群に対する捕獲圧のかかり方が、いっそう特定の性・年齢に片寄っていることを示している。

計画：2-1

兵庫県におけるニホンザル分布の実態調査

清水聡(福井県立大・看護短大)
三谷雅純(兵庫県立人と自然博・生態)
武田庄平(東京農工大・一般教育)

兵庫県のニホンザル分布については、清水と武田(準備中)によるアンケート調査から、その分布の概要が知られている。その内、豊岡市周辺の集団は、近年になってその存在が確認された、新しく出現した(移入した?)可能性の高い集団である。清水らは、現地における聞き込みを中心に、この集団の現在の観察可能域と農作物への被害状況の季節変化を調査した。

観察可能域は、豊岡市、城崎町、竹野町にまた

がり、およそ70kmにおよぶ。一回の観察頭数は常に数頭程度であり、集団は小さな集まりに別れて広域を広く移動していることが推定できる。また、農作物への被害は特定の作物に限定できず、この集団は作物が畑にあれば何でも食べるという行動を示す。ただし、イネへの被害は聞かなかった。また、多くの人がコザルの姿を目撃しており、現在のところ、一定の個体数復原力は保持しているものと思える。

豊岡市をはじめ、兵庫県但馬地方は積雪量の多いことで有名であるが、この冬の積雪のために元来はより海拔高度の高い地域にみられるブナ林が海拔300mほどから認められ、一方、谷沿いの植生はより海拔高度の低い地域にみられる植生が上部地域にも進出している。(ただし、豊岡市周辺では、人為的な影響からすでに潜在自然植生の照葉樹林は代償植生のコナラ林におき変わっている。)豊岡市周辺のニホンザル集団は、しばしば谷沿いを移動しているものと思えるが、彼らの土地利用はこのような但馬地方の植生分布に深い関係を持つことが予想できた。また、豊岡市周辺以外の但馬地方でも、人々は「サルは谷沿いに住む」という認識を持っており、今後、より具体的なニホンザルの土地利用と植生分布の関連は、重要な調査対象であると思える。

豊岡市周辺のニホンザル個体群をはじめ、但馬地方一帯のニホンザルは、いずれも小さな単位に孤立して分布しており、たとえ地図上でみる分布域は広く見えても、各集団の行動域が「異常に」大きいために、実際の個体数サイズはきわめて小さいことが予想できる。今後は、保全生物学的観点を取り入れた調査が必要である。

計画：2-2

大分県のニホンザルの生息分布および生息地の環境変化と猿害

長岡寿和(大分短期大学)

野生ニホンザルによる農林業作物への被害は大分県全域に及びつつある。そこで、大分県の野生ニホンザルの生息分布域と生息地の環境変化を年代ごとに調査している。

全国的なニホンザルの生息地の調査は1923年に長谷部言人がアンケート調査したものが最も古いとされている。このときの報告は岩野泰三〔に